

日本海スルメイカ漁場調査

(東奥丸によるイカ類漁場調査・青鵬丸による魚群情報速報事業)

大 川 光 則・仲 村 俊 毅・菊 谷 尚 久

発 表 誌 名

イカ釣漁場開発調査資料XIV(平成元年4月)及び昭和63年度外洋性イカ(スルメイカ・アカイカ)に関する生物測定・標識放流・海洋観測基礎資料集。

抄 録

沿岸域で操業する中・小型氷蔵船14隻、沖合で操業する中型凍結船20隻による標本船調査及び試験船東奥丸(調査海域 $37^{\circ}-14'N\sim 45^{\circ}-27'N$ 、 $135^{\circ}-12'E\sim 140^{\circ}-36'E$)、青鵬丸(調査海域 $40^{\circ}-09'N\sim 49^{\circ}-49'N$ 、 $139^{\circ}-00'E\sim 140^{\circ}-03'E$)による漁場環境。分布状況等について調査を実施した。

1. 漁 場 環 境

対馬暖流域の水温は平年に比べ低めに推移し、水塊配置からみた流型は、主漁期の6～7月蛇行型であった。

2. 分 布

- (1) 沿岸域 北上期の漁場は例年に比べ沖合への拡がりが目立ち広範囲であったが、南下期では、狭くなっていた。
- (2) 沖合域 北上期の漁場は日本海中央部で大陸寄りでの操業はみられなかった。南下期では11月から南下傾向及び日本本土寄り傾向が顕著となった。

3. 魚 体

沿岸域、沖合域とも例年に比べ、大型であった。

4. 水 揚 量

- (1) 沿岸域 主要四港への水揚量は、1,834 トンで、昨年を下回った。
- (2) 沖合域 凍結船の八戸港及び大畑港への水揚量は 16,439 トンで、昨年来 1 万トン程下回る低調なものであった。